

札幌市高齢者健康寿命延伸検討委員会

会 議 録

日 時：2023年5月22日（月）午後4時開会
場 所：札幌市本庁舎 10階 市長会議室

1. 開会

○事務局（西村高齢保健福祉部長） それでは、開始時間となりましたので、札幌市高齢者健康寿命延伸検討委員会を開会いたします。

私は、委員長選任までの間、進行を務めさせていただきます札幌市保健福祉局高齢保健福祉部長の西村でございます。よろしくお願いいたします。

2. 町田副市長挨拶

○事務局（西村高齢保健福祉部長） では、開会に当たりまして、副市長の町田からご挨拶申し上げます。

○町田副市長 札幌市の副市長の町田でございます。

本来であれば、秋元市長が出席してご挨拶を申し上げるべきところでございますが、代わりに私からご挨拶させていただきたいと思っております。

委員の皆様におかれましては、第2次札幌市まちづくり戦略ビジョンから引き続き委員をお引き受けいただいております。本当にありがとうございます。

戦略ビジョンのまちづくりの重要概念の一つでございますウェルネスプロジェクト、誰もが生涯健康で、学び、そして、自分らしく活躍できる社会を実現するために、生涯を通じた健康づくりや社会参加の場の充実に向けた取組を推進することとしているところでございます。

まず、委員の皆様もご存じのとおり、札幌市の高齢化率は年々上昇を続けております。2040年代には高齢者が4割を超える見込み、さらには、札幌市の健康寿命は、ほかの政令市や全国平均と比べますと短いこと、そして、もう一つ、高齢者の就業率がこれまた低いという傾向がございます。

今後、札幌市において高齢者施策を進めていくに当たりましては、高齢者が自ら介護予防やフレイル対策、そして、社会活動に参加したいと思える仕組みづくりを積極的に進めていかなければいけない、それが鍵になっていくのではないかと思うところでございます。

今後、札幌市といたしましては、高齢者施策を立案していくために、ウェルネス（健康）という観点だけではなくて、ユニバーサル（共生）、スマート（快適・先端）、IT技術等をどういうふうに取り入れていくのか、こうした視点からの検討も必要と考えているところでございます。

本委員会におきましては、皆さん、それぞれのご専門の立場からいろいろな形で知見をいただきたいと思うところでございます。

開会に当たりまして、簡単ではございますが、一言、ご挨拶を申し上げさせていただきました。よろしくお願いいたします。

3. 委員委嘱・紹介

○事務局（西村高齢保健福祉部長） 続きまして、委員の皆様への委嘱でございます。

既にお手元に委嘱状を配付させていただいておりますので、この配付をもちまして委嘱に代えさせていただきますと存じますので、ご了承いただきますようお願いいたします。

また、委員の皆様のご紹介についてですが、今、町田からもお話がありましたとおり、先生方には、既に2年間議論させていただいておりますので、資料1の委員名簿の配付をもってご紹介に代えさせていただきますと存じます。

続きまして、事務局であるこちら側の職員の自己紹介をさせていただきますと思います。

○事務局（栗崎保健福祉局長） 札幌市保健福祉局長の栗崎と申します。

皆さん、このたびは、お忙しい中お集まりいただきまして、ありがとうございます。どうぞよろしくお願いいたします。

○事務局（西村高齢保健福祉部長） 先ほども申しましたが、高齢保健福祉部長の西村でございます。よろしくお願いいたします。

○事務局（横谷調整担当課長） 高齢保健福祉部調整担当課長の横谷でございます。どうぞよろしくお願いいたします。

4. 委員長及び副委員長の選出

○事務局（西村高齢保健福祉部長） では、続きまして、委員会の委員長と副委員長の選任を行います。

要綱を配らせていただいておりますが、第5条第1項の規定によりまして、本委員会には委員の互選により委員長及び副委員長各1名を置くこととされております。

特段、皆様から意見がなければ、事務局に一任とさせていただきますと考えておりますが、いかがでしょうか。

（「異議なし」と発言する者あり）

○事務局（西村高齢保健福祉部長） それでは、委員長には梶井委員、副委員長には平本委員を推薦したいと存じますが、いかがでしょうか。

（「異議なし」と発言する者あり）

○事務局（西村高齢保健福祉部長） 異議がないようでございますので、梶井委員に委員長を、平本委員に副委員長をお引き受けいただきたいと思います。

それでは、梶井委員長には委員長席へお移りいただきますようお願いいたします。

〔委員長は所定の席に着く〕

○事務局（西村高齢保健福祉部長） それでは、恐れ入りますが、ここからの議事進行は梶井委員長にお願いしたいと存じます。よろしくお願いいたします。

5. 議事

○梶井委員長 梶井でございます。

ご指名いただきましたので、委員長の役を務めさせていただきます。

皆様とはまちづくり戦略ビジョン策定で一緒しておりますので、私も大変心強く思っ

ております。

これは本当に切実な問題でございますので、私も忌憚のない率直な議論をしていただければと思っておりますので、どうぞよろしくお願いいたします。

それでは、初めに、この委員会の運営方法について、事務局からご説明いただきたいと思っております。よろしくお願いいたします。

○事務局（横谷調整担当課長） 事務局を担います調整担当課長の横谷でございます。改めまして、よろしくお願いいたします。

資料のご説明をする前に、本会設置の趣旨と今後の検討に向けた状況等につきまして、改めてご報告を申し上げます。

皆様もご承知のとおり、本市の急速な高齢化の現状や今後の見通しを考えますと、市民の健康寿命延伸は喫緊の課題であり、我々としましても、これまで以上に効果的な具体策を早急に取りまとめて推進していく必要がある、このように認識しているところでございます。

そのためには、戦略ビジョンの策定におきましてお力添えいただきました委員の皆様、とりわけ、今後の高齢者の健康増進に対して深い見識をお持ちの皆様から、さらなるご助言を得られれば大変心強いと考えまして、本日の会議を懇話会形式で立ち上げることにした次第でございます。

先日、こうした趣旨を皆様に個別にお伝えさせていただきましたところ、即座にその場でご賛同いただきまして、また、非常に感銘の深いお話や貴重なご助言を多く頂戴しました。

また、大西委員からは、医学的なエビデンスに基づいたデータのご提供なども可能だという大変ありがたいお話をいただいたところでございます。ありがとうございました。

そこで、このようなことを内部で検討しました結果、懇話会形式でありますけれども、委員会として形を整えまして、できれば複数回にわたってご助言を得られるようにしたいということで、諸環境を整えさせていただくこととしましたことをご報告いたします。

この後、ご説明いたします本委員会の設置要綱等につきましては、このような経緯から形式を整えさせていただくものであることをご了承ください。

前置きが長くなりましたが、資料説明に移らせていただきます。

初めに、お手元の資料2の札幌市高齢者健康寿命延伸検討委員会設置要綱をご覧ください。

当委員会の設置目的ですが、第1条に、高齢者の健康寿命の延伸に向けて、高齢者が多様な社会参加や健康づくり等を通じた楽しみながら活動できる仕組みを検討する、このようにしております。

本会の位置づけは、会の合意として意思決定は行いませんが、専門家の委員の皆様から、高齢者が多様な社会参加や健康づくり等を通じた楽しみながら活動できる仕組みの方針や方法等につきましてご意見をいただき、それらのご意見を札幌市が施策を検討するために

参考とさせていただき、このような趣旨でございます。

第3条では、組織の構成につきまして規定し、第4条では、任期を今年度末と定めております。

第5条では、先ほど委員長を選任させていただきましたが、その手続や委員長の役割を定め、第6条では、会議の招集方法を定めております。

また、会議は公開とし、一般市民の方も傍聴できるように運営するとともに、議事録につきましても、後日、札幌市公式ホームページに掲載し、広く市民の皆様にご覧させていただきます。

第7条には、委員の報酬につきまして定め、第8条には、事務局の体制について規定しております。

要綱の説明は、以上でございます。

○梶井委員長 それでは、本日の議題に入っていきたいと思います。

お手元の次第には議事2と書かれていると思いますけれども、札幌市の高齢者施策と他都市の取組についてご説明をいただきたいと思っております。お願いいたします。

○事務局（横谷調整担当課長） 引き続き、説明させていただきます。

お手元の資料左上に資料3とありますA3判の三つ折りの資料をご覧ください。

左上の赤色の囲みでございますが、さきに皆様にご審議いただきまして策定しました第2次札幌市まちづくり戦略ビジョンで、まちづくりの重要概念としまして、ユニバーサル、ウェルネス、スマートを掲げ、特に、高齢者の福祉施策に関わるウェルネスでは、誰もが生涯健康で、学び、自分らしく活躍できる社会の実現を目指しております。

その実現のために、札幌市では、健康寿命の延伸に向け、高齢者世代における健康的な行動を促すソフト面の対策を行うこととしており、具体的には、高齢者が楽しみながら活動できる仕組みを検討し、行動を促していきたいと考えております。

ここでは、戦略ビジョンの戦略編で答申いただきました高齢者に関わるプロジェクトを抜粋し、大枠の考え方、方向性を紹介させていただいております。

まず、囲みの中のポチの一つ目でございますが、健康づくりや介護予防などへの参加の促進、高齢者等のフレイルや生活習慣病の発症等を予防する取組の推進、次のポチには、高齢者を中心とした市民の社会参加の促進に向けた意識の醸成、三つ目には、地域における支え合いの促進に向け、支援を要する高齢者等を地域で支えるボランティア活動を支援、四つ目のポチには、デジタル活用に不慣れな高齢者等に対する学びの機会の提供やサポートする体制の構築などがプロジェクトの方向性として挙げられております。

続きまして、高齢者の健康寿命の延伸について説明させていただきます。

左下の黄色い囲みの中でございます。

先に、左下の図1をご覧ください。

高齢者の人口につきましては、今後も増加が見込まれておまして、2040年代には高齢者人口は67万人に達し、総人口の約4割弱が高齢者となると見込まれております。

一方で、生産人口につきましては100万人を割り、総人口も197万人から185万人と減少することが見込まれております。

これらを踏まえて、上の二つ目のポチでございますけれども、健康寿命に関することとしまして、札幌市では、平均寿命の伸びを上回る健康寿命の伸びを目標として、後ほど紹介させていただくような取組を進めているところです。

ただ、右下の図2にございますように、残念ながら、札幌市民の健康寿命は他の政令市や全国平均を下回っているところでございます。

三つ目のポチにございますが、高齢者をはじめとする意欲のある方々が活躍できるよう、社会参加ができる環境の整備を進めるとともに、介護予防やフレイル対策などの予防・健康づくりを強化し、健康寿命の延伸を図る旨を記載しております。

これらのことから、札幌市では、健康寿命が全国平均に比べて低いといった課題を抱えている中、その延伸を図っていくことが我々の目標となります。

なお、健康寿命は、健康上の問題によって日常生活が制限されることなく生活できる期間をアンケートに基づいて調査、算出しており、現在、健康上の課題で、日常生活に何か影響があるかを尋ね、これにあるという人を不健康と定義するなどしまして、さらに、年齢別の死亡率と年齢別の健康、不健康の割合などを与えて求められるものとなっております。

続きまして、札幌市で行っている高齢者の社会参加や予防・健康づくりの事業に関して、右に一覧をまとめておりますので、緑色の囲みの下をご覧ください。

表の見方ですが、一番左の列には事業名、順に、事業概要、続いて、社会参加や予防・健康づくりの欄には、取組への寄与度ということで、高いほうから、丸、三角、無記載ということで示しております。

代表的な事業を紹介しますと、3行目の介護サポートポイント事業では、特別養護老人ホームなどの施設のボランティア活動を通じて人と接することで、社会参加や介護予防などを促し、活動内容に応じて換金可能なポイントを付与しているところでございます。

また、4行目の敬老優待乗車証は、高齢者の社会活動を促進するため、公共交通機関の交通費を助成する事業でございます。

ほかに、予防・健康づくりの観点からは、ウォーキングイベントや食生活改善に向けた取組、リハビリの支援などを行っております。

1枚めくっていただきまして、資料3の2枚目をご覧ください。

ただいまご説明いたしました札幌市が行っている社会参加あるいは予防・健康づくりの事業を紹介したところですが、ここでは、国の考え方等につきましてご説明をいたします。

上段に、国の考え方が記載されているところでございます。

まず、国では、健康寿命の延伸に向けて健康に関心が低い方々も含めた予防・健康づくりの推進等に向け、自然に健康になれる環境づくり、あるいは、行動を促す仕掛けとして行動経済学やインセンティブなどを活用し、次世代を含めたすべての人の健やかな生活習

慣形成、疾病予防・重症化予防、介護予防・フレイル対策、認知症予防の3分野を中心に取組を推進しております。

これを踏まえまして、他都市の状況を確認した結果を下にまとめております。

自然に健康になれる環境づくりにつきましては、本市を含め、他都市においても、運動教室や科学教室等と様々な取組を開催していましたが、既に札幌市においても老人福祉センターや健康づくりセンター、介護予防教室など、同様の種類の環境整備を進めてきたところでございます。

一方、行動を促す仕掛け（行動経済学・インセンティブ）につきましては、札幌市以外の状況を確認してみましたところ、ポイントを付与した上で動機づけを行っている事例が見られました。このほか、特段のものが現時点では見当たらなかったところでございます。

そこで、札幌市の事業を紹介させていただきますが、表の一番上の濃い緑色の行にあるとおり、介護サポートポイント事業というものを行っております。

具体的には、先ほども少し触れましたが、65歳以上の方が介護保険施設等でボランティア活動を行った場合、2時間未満の活動に1ポイント、2時間以上の活動で2ポイントを付与しているところでございます。このポイントは、手帳で年間管理いたしまして、1ポイント当たり100円に換算し、年間上限5,000円の現金に換金できる事業を行っております。

ほかの自治体を見ますと、行動を促す仕掛けとして、日常のウォーキングなどの健康づくり活動や、社会参加などをポイントで評価する仕組みを整えているところもあり、資料には記載しておりませんが、事業への参加者の割合が高いところでは、3割程度ということになっております。

これは、いずれの都市も事業に取り組み始めてまだ間もないというところで、これから普及が広がってくるところだろうと考えているところでございます。

今後、高齢者の日常的な活動に着目して、健康的な行動を促すソフト面の対策を行っていくためには、他都市の状況を参考にしながら仕組みを検討する必要があると考えているところでございます。

それでは、他の自治体の取組につきまして、下の表を用いながら代表的なところをいくつかご紹介させていただければと思います。

左の列、見方としては、順に、市町村名、事業名、事業概要、対象年齢、そして、ポイントの管理方法、ポイントの対象となる活動種類、また、ポイントの使用 방법이記載されております。

やや濃い色の緑色が政令指定都市で、その下の薄い部分がそれ以外の市を指しております。

代表的な事例としましては、ここでは上から6行目の広島市の取組を紹介させていただきます。

広島市では、高齢者いきいき活動ポイント事業という65歳以上の方を対象とした健康

づくりや地域支援のために行う活動の実績に基づき付与されるポイントを手帳で管理し、奨励金を支給しております。

続いて、資料の全体感としては、左から3列目の事業概要をご覧くださいますと、ほかの自治体で行われている活動を促す仕組みとしましては、下線を引いているポイント付与によるものとなっております。

続いて、右の列は、事業の対象年齢ですが、自治体によって差異がございますけれども、65歳、60歳以上の方に限定する自治体も多くなっているかと思います。

また、ためたポイントの管理方法は、手帳やアプリなど様々となっております。

ポイントの付与の対象となる活動も、自治体によって異なっておりまして、社会活動の参加では、例えば、町内活動や通いの場所への来訪、予防・健康づくりでいけば、ウォーキングや健康診断、その他の欄に記載のような活動が挙げられております。

札幌市と同じ2か所に丸がついているさいたま市や神戸市でも、その他の欄に記載の活動をポイントの対象となるなど、いずれの都市でも札幌市と比べて多岐な活動がポイント付与の対象となっております。

今後、札幌市におきましても、高齢者世代における健康的な行動を促すソフト面の対策を拡充することも考えていく必要があると考えております。

長くなりましたが、資料の説明は以上でございます。

○梶井委員長 ありがとうございます。

今日は初回ということで、当委員会の背景についてのご説明が前半に来ておりますけれども、事務局から、まちづくり戦略ビジョンの振り返りをさせていただきまして、その中の当委員会の位置づけを説明していただいた後、札幌市の具体的な取組、他都市の取組という流れでご説明いただきました。

ここからは皆様のご意見を頂く時間になりますけれども、他都市を見まして、魅力的なものが何かありましたか。

皆さんお若いですがけれども、私ならどれをやりたいかなと思いながら見ておりました。そういう観点でも結構ですので、いろいろなご意見をいただければと思っております。

2点の大きなテーマがあると思いますけれども、まず、どうすれば健康寿命は延びていくのかというところです。札幌市は、全国平均にも届いておらず、政令都市と比べても低いほうだということですので、そこには問題意識を持ちたいけれども、どうすれば健康寿命が延びるのかということがここで考えていきたい1点目のテーマになると思います。

2点目は、高齢者の方々について、先ほど就業率も低いというお話がありました。就業にこだわらずとも、どういうふうに社会参加を促していけばいいのかということも、皆さんからご意見、知見を賜ればありがたいと思っています。

今日はそういう観点から自由にお話ししていただければと思っておりますが、自由にとっても、誰が口火を切るのかということもありますね。

○高野委員 それでは、私からよろしいですか。

1点目のテーマの札幌はなぜ健康寿命が低いのかというところで、健康寿命のはかり方を調べてみたのですが、何かを物理的にはかるというよりも、意識の部分から寿命を表すという方法だと思います。そういう意味では、幸福度調査というものが世界的にやられていまして、日本は、特に若者で比較をすると、圧倒的に幸福ではないという結果が出てくるのです。あれは、実際に幸福かどうかというよりも、私は幸せですと書くことに対して日本国民はあまりプラスの評価をしないので、いやいや、大変ですよという評価になるから、比較すると幸福度が低いというふうに出てしまうと思うのです。

それと関係があるかどうか分からないですけれども、大西委員が詳しいと思いますが、なぜ札幌は健康寿命が低いのでしょうか。高めるためにはそこが一番のポイントかなと思うのですが、いかがでしょうか。

○大西委員 今おっしゃっていただいたように、主観的な評価で、健康によって日常生活に何か制限がありますかという質問に「はい」と答える方ということになりますが、健康という言葉自体も定義がなかなか難しいのです。WHOは、単に病気がないとか虚弱であるということではなく、身体的、精神的、社会的に完全な状態で、その三つがそろって初めて健康であるという考え方です。ですから、健康によってというのは、いわゆる病気があって生活に制限があると捉える方もいれば、精神的なものや、友人とか家族とのつながりが不十分で健康とは言えないと受け止める人がどれくらいいるのかということも影響しているのです、なかなか難しい指標であると思います。

もう一つは、人種的なことで、文化的な背景もあると思いますが、日本人は控えめな方が多くて、完璧ですとか非常に健康ですと答える人がなかなか少ないということもあると思います。

ただ、主観的健康観自体は、健康であると答える人が日本全体でも少しずつ増えてきていますので、謙遜してわざと低い評価をしている方はそれほど多くないのではないかと思います。

また、健康寿命が縮まる原因として、身体的には疾病から来る不健康が日常生活を制限するということがありますので、例えば、循環器系の疾患とか、認知症とか、何らかの介護が必要になる状態が起こり得るような疾病が増えてくれば、健康寿命も短くなっていくということになります。

あとは、社会的なつながりが薄くなって、人と人とのつながりが減ってきて、生きがいを感じられなくなってくると、健康とは言えないと回答する方も増えてくるということはあると思います。

札幌市がほかの政令市と比べて健康寿命が低い原因はこれだと指摘するのは難しいと思うので、疾病が実際にどうなのか、社会的なつながりがどうなのかと多面的に広く考えて、なぜ健康によって生活に制限があると答える人が増えているのかというところを評価する必要があります。

回答になっていなくて、申し訳ありません。

○梶井委員長 私は社会学をやっている、社会的なつながりが低いと健康にすごく影響を与えるということは、ロバート・パットナムのソーシャル・キャピタル論の中では随分繰り返されていますけれども、大西委員がおっしゃるように、札幌のまちはつながりが非常に低下しているという特徴があるのではないかと薄々感じているのです。今、高齢者の流入が増えていますし、道内の札幌市以外から女性の流入も多いということで、地縁、土地的な縁のない人たちが札幌に流入しているところが、他都市に比べて人と人とのつながりを薄れさせている背景としてあるのかなと思うのです。それは、あなたは健康ですかという主観的な健康寿命の問いに対する否定的な回答に影響しているのかなと、懸念を感じているところです。

○山本委員 今の高野委員の切り口は、なるほどなと思いました。札幌は健康寿命が短いというファクトがあるということですが、逆に健康寿命が長いのはどういうところなのかという素朴な疑問が上がってきて、そこの文化的背景の違い、あるいは、経済格差や気候風土などの違いは分析の重要なポイントの一つではないかと思います。

札幌の健康寿命が低いことが分かったと同時に、いいところも分かったのではないかと思うのですが、そこに関するデータはあるのでしょうか。

○平本委員 資料を見ると、浜松などが高いですね。

○事務局（西村高齢保健福祉部長） そうですね。見づらくて申し訳ないのですが、今日つけさせていただいている図2が、今おっしゃられたとおり、浜松、名古屋、相模原、千葉、新潟、福岡という辺りは女性が高いです。男性は、神戸、静岡、名古屋、相模原、仙台と大体平均的で、低いところが目立って、大阪、福岡、札幌、堺、京都ですね。

○山本委員 では、大阪、福岡、札幌という一つのグループと、浜松とか相模原ですね。浜松には私の知人がいるのですけれども、暮らしやすさというか、気候的には最高で、カリフォルニア的な天候なのです。冬も寒くないし、夏もそこそこ過ごしやすいです。やはり、気候風土ファクターと、そこから来る食生活というのは一つの大きな原因ではないかという印象を受けます。でも、それはなかなか置き換えられなくて、気候風土というのは、そうしたいといってもできませんから、それ以外に何ができるかということを考えなければいけないですね。

○梶井委員長 女性は、まちによって随分と凸凹がありますね。でも、山本委員がおっしゃるように、健康寿命が高いところは何が共通しているのか、どんな施策を打っているのかというところは興味深いですね。

○平本委員 健康寿命の定義が思ったより曖昧なのだなということに気がつきました。

先ほど、WHOの健康の定義は、身体的、精神的、社会的という三つの側面から考えるという説明がありました。例えば、私が大学生になって札幌に初めて来たときにすごく印象深く覚えているのは、札幌の人はつえをついている方とか、ちょっと足を引きずっている方が割と多いなということでした。そう思っていたら、やっぱり、冬に転倒して足や腰を痛める人がいるので、そういう方が多いのではないかということを使う人がいます。

これは身体的な話ですが、今、まちづくり戦略ビジョンでウォーカブルシティということをうたっています。物理的に排除できるところと、梶井委員長がおっしゃる社会的、精神的なところとのファクターを分けて、最後は健康で全部つながっているのは事実ですけども、物理的なアプローチで対策できる場所があれば、そこを排除していくことで、本当に転倒が原因なのかどうか、本当のところは分からないのですけれども、三つの側面のどこからどういうふうアプローチするのかということをし少し個別に考えて、それから総合的なアプローチを上から考えるという2方面作戦が有効なのかなということ、皆さんの議論を拝聴しながら思いつきました。

○梶井委員長 身体的、精神的、社会的ということですね。

○高野委員 私はウィンターライフ推進協議会というところでつるつる路面の転倒について20年やっていて、そこで調査をしますと、年間に1,000件の救急車の搬送が出るのですが、それは本当に氷山の一角で、標本数が少ないので正確性は低いのですけれども、札幌の人口200万人のうちの2万人くらいは年間に転倒でけがをされているという推計が出ます。打撲がかなり多いので、交通事故と比べると、けがの程度は低いのですけれども、量としては多いです。

また、高齢者に限って言いますと、骨折になると致命的で、特に大腿骨や股関節を痛めますと、ほぼ数か月以上の入院になって、脳の働きが悪くなるため、死亡率がかなり高くなります。ですから、骨折が寄与している可能性はかなり高く、無視できないと思います。ただ、北海道内を見ると、どこもほぼ同じくらい転んでいますので、札幌だけが高いわけではなくて、積雪寒冷地は大体似たような転び方をしているということですが、全国の他都市と比べると、無視できない要因ではあると思います。

○平本委員 私は新潟出身ですけども、新潟市は、それほど雪が積もらないですし、凍りもしないのです。

○高野委員 雪が解けるので、つるつるにはならないのです。

○梶井委員長 この間、長崎に行ってきたのですけれども、坂が多いのです。そして、坂の上にお家があって、高齢者は毎日行ったり来たりなさっているのですね、小樽もそうですが。本州から札幌に来られた方は、札幌のまちはフラットで意外とつまらないと言うのです。すごく起伏のないまちですねと言われて、私はつくづく思ったのですけれども、フラット過ぎて足腰が弱くなっているのではないですか。

エビデンスはないのですけれども、札幌市民の足腰が弱くなる原因として、こんなこともあるかもしれないという見せ方というか、仕掛けですね。本当に意識的に歩かないと、ますます弱っていくということですね。

先ほど委員の控室でも出ていたお話で、地下鉄の階段のところここまで上ると何キロカロリー消費と書かれているのは、私には意外と刺激的で、あれを見て、エスカレーターに乗らないで階段にしようと思ったりするのです。本当にちょっとした仕掛けですけども、市民に示していくということですね。こんな弱みがあるから、ここを強化したほうが

いいですよとか、そんなところの気づきでもいいような気がします。

○山本委員 今の委員長のお話を聞いていて、図2の健康寿命の政令市の比較を見てみると、神戸市と大阪市はほぼ隣接地なのに、神戸市が2番目に寿命が長いのに対して大阪市は最下位なのです。何が違うかという、神戸には六甲山があつて、大阪は真っ平ですね。私は福岡にもよく行きますけれども、福岡市に限って言えば、まちは平らです。

これは大西委員が詳しいのでしょうか、ある医療関係者から、60歳のときに自然に歩く速度、平均歩行速度を調査すると、その後の寿命と極めて強い相関を持つファクターだという話を聞いたことがあるのです。それは、結局は脚力ですよ。

私も同僚などを見ていると、歩く速度が急に遅くなった人というのは、言い方は悪いですが、その後体調を崩されるというのを何度も経験していますので、今の委員長のお話は、なるほど合点がいくなと思いました。

これはエビデンスも何もない数サンプルの話ですし、保健所でそういう調査はしていないと思うけれども、そういうものをファクトとして把握しておくといいのではないのでしょうか。

特に、坂と健康寿命の関連ということに強烈な相関が出てきたら、大変面白い知見になるのではないのでしょうか。

○梶井委員長 札幌は、周りになだらかな円山や手稲山があるので、そこに誘導していくと。まちなかは真っ平で足腰を鍛えにくいので、こういうルートで登って、日本百名山まではいきませんが、「百低山」のようなものを提示していくとか、楽しみながら鍛えましょうというアイデアですね。そんな気づきから始めるということですね。

○山本委員 ちなみに、札幌には、登るべき山として札幌50峰というものがあるのです。

○梶井委員長 50もあるんですね。

坂のない分、そういうところで補填していくというアイデアなりを提示してはいかがでしょうか。

○大西委員 確かに、歩数も大事ですけども、歩行速度もやはり大事なのです。フレイルの診断基準の中にも歩行速度が入ってしまっていて、それが落ちてくると要介護状態のリスクが高まるというデータもあります。また、歩行速度で死亡のリスクが予測できるというデータもありますので、歩くスピードも結構重要ではないかなと思っています。そういう意味では、平地だから不利とかよくないというわけではなく、だらだら歩くよりは意識的に早足歩行にするといいですか、スピードを意識するというのは結構重要なのではないかなと思っています。

また、階段利用というのが言ってみたら坂道歩行と同じような効果がありますので、階段を使うということを意識的に増やすというのも重要なのではないかなと思っています。

特に、最近、スマートフォンでは、歩行速度や歩幅など、いろいろなデータが取れるようになっておりますので、歩数計による歩数だけではなく、スピードを意識して歩くようにするのがいいのかなと思っています。また、アプリを活用したというほかの市のお話もあり

ましたけれども、そういう普及啓発をすることも一つの対策になるかなと思います。

そして、実際にどれくらい動いていないかを市民の方が意識することも重要ななと思いました。例えば、札幌市の高齢者の歩行速度の平均というデータ自体、そもそもないのではないかと思います。でも、速いのか、遅いのか、そうした実態を何かしらデータとして取得できるような仕組みがあれば、これだけ遅いので、皆さん、平均を上げるように少し早足を意識しましょうと呼びかけられるのかなと思います。

また、高齢者で階段の利用頻度やエスカレーターに乗る人と階段を使う人の割合がどれくらい違うのかというデータもないのが実際かなと思うのですね。でも、そういうデータがアプリと連動して自動的に収集されるような仕組みがあると、階段を利用している人が最近増えてきているというような評価にもつながるかなと思いますので、そういう実態把握を一步突っ込んでというふうに思います。

歩数は昔からずっと取られてきていますが、最近、札幌市では、10分多くというように時間に換算し、1日の中で何分くらい歩いているかを意識するというふうに少しずつ変わってきていますよね。そこで今度は速度を意識しましょう、歩幅も意識しましょうなど、そういう視点を加えることも工夫の一つになるのではないかなと思いました。

○高野委員 今の関連です。

交通のほうでは歩行者速度を測っているのですが、各地によって違いが見受けられます。端的に言いますと、一番速いのが大阪で、一番遅いのが沖縄だと言われています。大阪のまちなかにいる方たちは速いのですが、高齢者になってくるとそれにだんだんついていけなくなってしまって、平均から遅れてきてしまい、それで健康寿命が短いのかなと思っていたのです。ですから、物理的な速度だけではないのです。これは仮説の仮説ですけども、大阪の人たちは速く歩くのが当たり前になっていて、それにだんだんついていけなくなるから健康寿命が低いということもあるのかなと思っているということです。

○町田副市長 国交省ではウォーカブルシティと盛んに言っていますが、歩いて楽しいまちかどうかで札幌を見た場合はどうかです。特に、札幌の場合、冬は高齢者が歩けるところがチ・カ・ホくらいしかないわけで、冬にいかに歩けるかです。チ・カ・ホを一生懸命歩いている高齢の人を見かけますけれども、冬もいかに歩けるか、それをどう考えていったらいいのかですよね。

12月から3月まで全然歩かないのです。自分自身のことを振り返ってもそうで、やっぱり、そこを考えなければいけないかなと思っています。

○山本委員 高齢者の行動様式ですよね。

何回も言っていますがけれども、私は今年で70歳になるのですね。ですから、もう高齢者の領域です。ただ、こういうことを考えているのです。それは、若い人から見た高齢者と高齢者から見た高齢者は違うということです。若い人から見ると、高齢者は一様に高齢者なのです。ですから、65歳というような数字を一様に入れるのです。ところが、高齢者から見ると、それぞれなのです。最近はLGBTQが話題になっていますが、年齢の認

識は個人によって違いますし、70歳という年代になってくると全く違うのです。そこに一つのヒントがあるのではないかと思います。

例えば、各政令指定都市の施策を比較した資料がありますが、対象年齢を見たとき、65歳、60歳、18歳、40歳、要件なし、70歳とありますよね。コストで考えると、こういう対策は高齢者に向けるので、高齢者から入るのです。だから、国が決めた65歳という高齢者の入り口年齢なのです。ところが、歩くというようなことは習慣ですから、早い時期に始めないといけないのです。

これは医療機関の方のほうがはるかに詳しいのでしょうけれども、症状が出てから始めても遅いのです。当然、治すのはお医者さんだろうけれども、そうならないことが一番大事ですよと言うわけで、それは医療ではないのです。その取っかかりとして歩くという習慣をつけてもらおうと65歳を対象にアナウンスしても、恐らくそれでは遅いのです。

僕がすばらしいなと思ったのは横浜市で、18歳から歩く習慣をつけようとしていて、これが定着しているのです。つまり、制度設計をするとき、年齢ではないのですよ、健康寿命なのですよと考えるのは一つの切り口ではないかと思うのです。

年齢で考えると、もしかすると問題を勘違いするのではないかと思います。高齢者の問題だから高齢者にではなく、高齢者に問題が起こるのはこれまでの生活習慣の積分なのです。我々、理系の者から言うと積分の効果なのです。ですから、そう考えて対策や施策を考えるのが一つの視点となるのではないかなと思います。

○梶井委員長 本当におっしゃるとおりだと思います。

高齢者だけに焦点化すると、高齢者の当事者としては何だかな、あまり参加したくないなという気分になりますよね。そこで横浜市はうまいことを考え、対象年齢を18歳以上として、景品抽せん会に参加できるようにしているわけですよね。それに、こうすると孫と競えるのです。そして、孫のために歩こう、孫と一緒に歩こう、あるいは、息子や娘でもいいと思うのです。中年期の方だってそんなに歩かないと思うのです。仕事が忙しく、パソコンに向かっているばかりだと。ですが、自分の息子・娘世代と競えるわけですよね。そして、抽せん会と一緒にいくということですね。

○山本委員 委員長の考えていることは私と極めて近いです。

これはどこかで言おうと思っていたのです。私は70歳近いのですけれども、日本百名山を順番に登っていて、4月も九州まで行ってきて、二つ登ってきました。結局、何なのかですが、ゲーミフィケーションという言葉があって、ゲーム化するのです。ただいいことをしたらあげますよと言われても、では、いくらやればいいのかという話になりますよね。

今、日本百名山というのはブームなのだけれども、これのすばらしいところは100でコンプリートなのです。世に言うコンプリートゲームというものなのです。そして、100が終わったら今度は二百名山、三百名山となって、札幌だと先ほど言った札幌50峰があって、これを全部登ったとなるのです。これは先ほどの抽せんと同じです、年齢は

全然関係ありません。私は66歳から始めましたけれども、別に何の問題もないのです。それに、目標といいますか、コンプリートするターゲットができる、では、体力をどうつけるかなど、自然と考えるのです。逆に、健康寿命を延ばすために運動をといったとき、何のために健康寿命を延ばすのか、それだったら酒を飲んで寝ていたほうがいいのではないかというカウンターの言葉が来ます。

ですから、そういう楽しみをつくるといいますか、目標設定でして、それがうまいまちでは健康寿命が知らない間によくなっているのかもしれないかもしれません。だから、そんなにすごいことではないのではないかと思いますし、そうした目標をつくれるまちでは健康寿命が長くなるのではないかと感じています。

○梶井委員長 歩くことにどういうインセンティブをつけるかですが、先ほどから出ているように、1人ではなく、誰かと刺激し合っということもあると思いましたが、そういったときにつながりがないといけないのかなとも思いました。景品抽せん会で景品をもらえるよと言われても、競う人や刺激し合っ一緒に行ける人などのつながりが薄いと踏み出せないと思います。そのためのつながりのつくり方で、これは社会的な側面のことにもなりますけれども、そうしたことについて皆様からご意見をいただければと思います。

いかがでしょうか。

○平本委員 歩く速度や距離についてアプリを使うと割と簡単に情報収集ができるのではないかというお話が先ほど大西委員からあったのですけれども、そういう客観的なデータを持つということが必要だと思うのですね。

もう一つ、山本委員がおっしゃったゲーミフィケーションという観点からいくと、例えば、百名山を登る、札幌50峰を登るということもいいですけれども、札幌は都市で、ビルがいっぱいあるから「札幌ビル登山」をやろうということもできますよね。それこそ、コンプリートゲームで、全てのビルに何回上ったか、それをアプリで管理し、誰かと競えるような仕組みをつくるのです。つまり、都市である札幌の強みを生かすというようなことです。これだと冬でもできますよね。高齢者の方もスマートフォンを使いますし、若い方はもちろんです。

また、年齢については私も山本委員と同感です。18歳でもまだ高いくらいで、お孫さんと一緒に歩くのだったら、枚方みたいに要件なしにしてもいいのではないかなと思います。

比較的安価で開発できるアプリを使い、バーチャルなライバルと競えるような仕組みをうまく仕組み化すると結構気楽に参加できるのかなと思いました。

○梶井委員長 何か、わくわく、そして、夢が膨らんでいきますね。

○高野委員 アプリについて言いますと、サツドラでは歩数によってポイントをもらえますね。私の妻なんかは、しまった、今日、スマホを忘れてしまった、これだけ歩いたのにポイントを稼げなかったと言っていましたけれども、そういうものをやっているのです。

それから、使わない人が多いですが、大体のスマホには歩数計がもともと入っているの

です。なおかつ、それがいろいろなものに関係しています。

それはそれとして、どういう人たちがどれだけ利用しているのか、あるいは、年齢別の使用の頻度などのデータをサツドラからもらえる可能性はあるかと思います。

○平本委員 やはり、客観的といいますか、ある程度きちっとしたエビデンスに基づいて施策を展開されるのが理想的だと思います。歩くことがいいことは間違いないと思うのですが、歩くことと精神的な健康や社会的な健康がどうリンクするのか、そして、どこを一番最初に刺激してあげるとほかの二つがついてくるのかです。ここまでのご説明を伺ってもその研究はあまりされていなさそうですね。ここは研究する委員会ではないのですけれども、そういうようなアプローチといいますか、客観的なデータに基づいて施策を展開するという思考を我々は持つべきではないかと思います。

○梶井委員長 データを見せることはすごく重要だと思います。そして、受け取ったほうがこれならばと判断するエビデンスにまさになるので、そういう意味では、できるだけそういうものがあるといいなと思いますね。

ここは未開発なところかもしれませんが、集めれば何とかかなりそうですね。

○大西委員 そうですね。ある程度のエビデンスはあるのではないかと思いますので、次回までの宿題として調べたいと思います。

○山本委員 今のエビデンスの話で気になっていることが一つあります。

経済に関わって、例えば所得やGDPなど、いろいろなデータがありますが、悪い方向に動いていると思うのです。ただ、別な見方があって、若年、つまり生産年齢の方がどんどん減ってきて、高齢者が増えているわけで、結局のところ、生産額が下がったのは日本人が劣化したのではなく、人口構成が変わったからですね。エビデンスを取るとき、そこがすごく微妙で、単純にやってしまうと、高齢化の傾向の中でせっかくやった努力が埋もれてしまう可能性があるのかなと思うのです。ですから、その補正を考えておかないといけないと思っています。

世間の人は単純にデータを見て、例えば途上国はこんなに生産性があるのに日本は、特に札幌はとなるのです。でも、高齢化の進捗率が北海道は圧倒的に高いですね。また、札幌の生産人口について言うと、18歳のときに東京に移っているわけで、統計を誤読してしまうのです。だから、そういうことをうまく織り込んだ見方をぜひしていただきたいなと思っています。

メディアでは面白いデータを捕まえてくるのですが、それには別な意図があったりするので、そこはクレバーに考えていただきたいなと思います。

○町田副市長 働いている人は働いているわけですからね。

○山本委員 そういうゾーンで見るということですね。

例えば、生産に携わっている人、あるいは、年金生活者など、ちゃんとカテゴライズしないと、日本で所得がどんどん下がっていると言いますが、見方によって大分変わってくるのだと思うのです。ですから、政令指定都市札幌たるもの、そういうインテリジェンス

のあるはかり方を考えてやっていただきたいと思います。

○梶井委員長 年齢層を分けての比較、もちろん男女別ということもあるかもしれませんがね。

○山本委員 エビデンスをつくる時、間違っただけを持ってきて、それに基づいて施策を決めても決して幸せなことにはならないのではないかとということです。

○梶井委員長 委員のお話とはちょっとずれるのですが、2042年になると高齢者が67万人になるということですよ。そういう数字を言うとき、その言葉の背後に困ったものですよという響きを感じるのです。でも、よく考えたら、それだけ長生きしているということですよ。だから、こんなに長生きしている人が多いまちなのですよという明るいニュアンスといいますか、それは困り事ではないのだというニュアンスも欲しいなと思っていました。

○山本委員 全くそのとおりで、当事者としては厄介者にしないでほしいと思っていました。

○梶井委員長 みんなで一緒に社会参加しましょうよというような機運というのでしょうか、ここで一緒に老いて、楽しんで、社会参加してみたいな、そういう人が4割になったらすごいよねという感じに明るくしたいなと思いますね。

ほかにもアイデアがありましたらお願いします。

○高野委員 全然違う話です。

平本委員がいる前と言うのはばかれますが、札幌というのは1次産業や2次産業が極端に小さいといいますか、低いまちですよ。2次産業の工場も少ないですし、1次産業についてもそうです。それに、割と機械化してといいますか、庭先でと言うとちょっと極端ですが、いわゆる農村社会がほとんどないというのが特徴ですよ。

広島や浜松などは、中心部はもちろん都会ですが、周辺部には農村社会がまだあって、物のやり取りがありますし、自分で畑をやったり、田んぼをちょっとだけつくったりがあるので。

そして、先ほど町田副市長からお話があったように、冬になるとぴたっと外に出られなくなってしまうわけですが、産業構造の面からもそういうところが結構あると思うのです。そこにもし要因があるとすると、それをどう打ち砕くか、農村社会型の人の交流をどう実現させられるか、難しいとは思いますが、それも考えたほうがいいのかと思います。

○梶井委員長 第1次産業が主体であれば、おのずとそこにコミュニティーがあるわけですよ。でも、そういうものが札幌では本当に薄いかもしれませんね。

○山本委員 でも、それは札幌市で考えるからそうであって、札幌圏で考えたら農村地域も多いですよ。だから、札幌圏という考え方が非常に重要で、札幌圏の中核都市として札幌市があると思うのです。

○梶井委員長 もう一つ、産業構造という話が出ましたけれども、今、札幌の飲食業では

働き手不足なのです。そうしたところではぜひ高齢者を雇ってほしいですね。若い人が注文を取っているのですが、もう疲弊しきっているのです。ビールはまだかなと思っていても催促するのも申し訳ないような、アルバイトの方も含め、若い人は疲れきっていて、薄野にも高齢者を雇ってみてくださいと声をかけたほうがいいと思うのです。そんなことを札幌市の立場で言えるのかどうかは分かりませんが、そういうロールモデルのようなお店が一つできればと思います。

また、私たちにも、そういうところは若い人たちがてきぱきやるところだみたいな思い込みがあるのです。でも、若い人も疲れきっていて、注文を取るときもてきぱきしていないのですよ。ですから、そういう発想があってもいいのかなと思っています。

○山本委員 それはすごく大事だと思っています。

結局、今、デジタル化というものがありますよね。土曜日、ある店に行ったら、3月までは人がオーダーを取っていたのですが、タッチパネルになっていたのです。便利でいいかなとは思いますが、結局、それが雇用を喪失させているのです。そして、その分、投資がIT関係のほうに行っているのです。その機器はどこのものなのかと思って蓋を見ましたら、中国製とありました。ですから、経済効果は札幌にはあまりないということです。それは人手不足という課題を解決していると見れば成果にはなるのですが、長期的に考えますと、では、皆さんが所得をどのように得るのかということですね。

もちろん、働かなくても十分な収入が得られる、そういう社会が我々のゴールだと言うならそれはそれで構わないですけれども、そういう話は寡聞にして存じ上げません。ですから、委員長のおっしゃるように、労働力の適正配置です。従来の18歳、あるいは、22歳からの就労モデルではなく、人生を3フェーズに分け、段階ごとの労働力バランスを考えるなど、そうした考え方を市なり国なりが打ち出さないといけないのではないかと思います。

単純に雇用不足ということに陥ってしまうと、何のために我々は存在するのかというのがその次の段階で出てきますよね。それで、反社会的とは言わないですけども、現状破壊みたいなロジックになり、世代間対立になりますよね。今、結構深刻なのは世代間対立だと思うのです。若者は何で高齢者の年金を払っているのかとなっていて、高齢者は高齢者で、俺たちは働いたのに何で年金が少ないのだと言って、対立なのです。ですから、札幌こそ先をちゃんと見据えた就労モデルを、そして、その中に健康寿命を延ばすという仕組みがすり込まれていけばいいと思います。それをわざとらしく健康寿命のためと言われても、我々当事者としては、おまえは何を言っているのだと思うわけですし、そんなことは自分たちで考えるというプライドもあるのです。でも、社会の健康な成長がベースですね。社会が健康でもないのに個人の寿命が延びても別にうれしくないですよ。この会議名は健康寿命延伸となっていますけれども、社会の健康も同時に考えるということをちょっと気にしていたほうがいいと思いますね。

○梶井委員長 健康寿命を延ばすということになると課題が矮小化されてしまいますけれ

ども、その背後に何があるのかですね。委員がおっしゃったように、世代を超えてつながるといことがまさにこれからの社会では要求されていることだと思います。飲食店で若い人と高齢者が一緒に働いてもいいと思いますし、ほかのところでもいいと思いますけれども、何かのきっかけでそうなってほしいですね。

○山本委員 僕は田舎の出身ですが、そこでは3世代や4世代の同居が普通だったのです。でも、今、3世代はまずないですし、老人世帯というと老人家庭ですよ。例えば、職場が3世代になっていてもいいと思いませんか。職場に70歳ぐらいのおばあちゃんやおじいちゃんがいて、労働している、それから、マネジメントをやる中堅の方がいて、20歳代、30歳代の若い方が上の人を見ているのです。

恐らく、今の社会の構図は、65歳や60歳が出口となっていて、社会の中におばあちゃんやおじいちゃんのロールがないのです。昔は家庭の中にあったのです。家庭では今の形が幸せだというふうになっているとすると、それをいきなり変えるのは無理です。そこで就労環境です。そこに3世代同居モデルをつくるのです。そうすると、社会がすごく強くなるような気がします。

○平本委員 私は今の山本委員のお話に大賛成です。

例えば、今、シルバー人材センターがあって、いろいろな仕事をやっているのですけれども、もっと視野を広げてもいいと思っています。

先ほどの飲食店の話もそうでしょう。それから、現役時代の経験を生かしてまだ十分にやれる方はたくさんいらっしゃると思うので、3世代就労モデルはすごくいいと思って話を伺っていました。

札幌市にはいろいろな施策があるのですが、ここにあるものは範囲が結構狭いので、もう少し視野を広げ、一度リセットし、ゼロベースにして、場合によっては高齢者というくくりも少し緩め、いろいろなところに社会参加できるような仕組みをつくっていくということがすごく大事ななと思いました。

先ほどの身体的、精神的、社会的の三つのうち、どれが一番のツボなのかは分からないのですが、いい社会ができて、いつまでも社会参加が積極的にできるような社会になっていけば精神的な健康にもつながるでしょうし、実際、家から出る機会が増えれば、歩く機会も増え、そういう好循環が生まれると思います。

今日の皆様方のお話を伺って思うのは、まず、高齢者という縛りをなくそうということです。それから、先ほど物理的に直せるところは物理的に直せばいいではないですかと言いましたように、それはそれでやればいいと思うのです。でも、限定しないで広く構えたほうがいいのではないかとここまでの話を伺っていて感じた次第です。

○町田副市長 例えば、保育の現場なんかは本当に困っているわけですよ。今、保育士を養成する大学自体も人が集まらなくなってしまっていますでしょう。それで、保育の現場なんかは、そもそも外国人が日本には来ないので、外国人を雇って保育の現場で保育士になってもらうわけにもいかないし、ロボットやITも全然無理がある中で、子どもを抱

きかかえるのに腰が痛くなってしまふみたいな問題があるかもしれないのですけれども、そういったところも高齢者の皆さんに助けてもらうような形にならないと、保育園は、建物はいくつもできるのですけれども、肝心の保育士が全然いないので、委員がおっしゃるような形で、前提を取っ払って考えなければいけないのかもしれないかもしれませんね。

○平本委員 子どもを抱きかかえる仕事に関しては、パワードスーツやマッスルスーツというものがもう既に開発されているので、そういうものを使えば、大分腰に負担をかけずに作業ができます。方策はいろいろありますよね。あとは、それをどう結びつけてパッケージにしていくのかというところの腕の見せどころだと思います。

○梶井委員長 そうですね。年齢によって色分けするというのは、本当に近代主義の弊害ですよね。それが定着しているので、私たちの観念にも当たり前のようにありますけれども、先ほど山本委員もおっしゃったように、高齢者といったって、非常に多彩で、十把一絡げに論じることもしないしということを考えれば、札幌市としては、年齢で区分けするような物の見方はしないのだということをお断言に言っていってもいいと思うのですよね。むしろ、そういうまちなのだというような宣言をすると。

○高野委員 都市計画学会でこの2年間ずっとやってきたのは、よりどころということなのです。今日の道新でも、なぜ若者が大通の地下のところに集まっているいろいろなトラブルを起こすのだろうということで、居場所がないという話が出ましたけれども、でも、居場所をつくるということで、例えば、これから札幌はどんどん都心開発されていって、オフィスや高級ホテルなど、立派な商業施設ができるのだけれども、本当にみんながあずまじいと思えるような居場所ができるのかというところは、都市計画学会でも危機意識を持っていて、どうしようかと考えているのです。

例えば、神奈川の例なのですけれども、認知症の人もいるような老人ホームを外に解放して、壁を取り払って、その中に子ども食堂みたいなものをつくるのですよ。そうすると、時間帯によっては多少ありますけれども、子どもがそこに遊びに行ってお飯を食べている近くに高齢者がいて、そこでちゃんと優しく見守っていて、トラブルがないようにコントロールしているのです。悪い高校生なんかはたばこを吸ったりするらしいのですけれども、それはちゃんと怒りつけて、それでもまた来るような仕掛けをして、そういうふうにするので、みんながそこに寄ってくるというたまり場を福祉施設の人がつくっています。そのほか、見事に商業施設や障がい者の就労施設をつくったり、コインランドリーで洗濯物を引き受けたりしています。ですから、箱物とは違うのでしようけれども、よりどころをつくるということですね。

全世代がコミュニケーションを取れて、そこに毎日通いたくなるようなよりどころをつくるといっても、特に札幌の都心部は、これから堅くて立派でお金のかかりそうな建物がいっぱい出来上がりそうで、何かほわっとしたものがどんどんなくなってしまうような気がしているのです。それをどう変えていくかというのは、やはり、世代を超えていろいろな人を集めてしまふ、だけれども、そこをマネジメントする人がいないと、大通みたいに

使用禁止になってしまうのですよね。そこが非常に難しい部分で、法律や条例、ルールでは縛れないのです。実際の成功例としては、親分がいて、たばこを吸ったら怒られるぞというような人がいて、優しく怒ってくれるということなのですよね。

○山本委員 今の話はすごくぴんとくる場所があって、私も孫が4人いるのですけれども、母親に話を聞くと、こういうことを言っていましたね。子どもが成長するときに重要なのは、いかに多様な人と接したかなのだそうですよ。つまり、これまでの教育というのは、言い方は悪いけれども、大学進学というゴールに対して、最適化された、無駄のない、いい大学に入る、一流大学進学モデルだったのです。ところが、それで問題になるのは、人間の人格形成やコミュニケーション、つまり、世代を超えたコミュニケーションなのです。私が就職担当をしていたときに、大手の会社の就職担当者に話を聞くと、絶対外れない人がいるのですよと言っていたのです。それは、おばあちゃんっ子だそうです。つまり、おばあちゃんと一緒に生活していた子どもは、精神が非常に安定しているのだそうです。なぜかというと、お母さんとおばあちゃんはロールが違うので、違う人がいるということを経験して育つのです。

もう一つ、僕もそうだったのですが、田舎の子どもというのは、隣のおじちゃん、お兄ちゃんが全部ごっちゃなのです。なぜかというと、田舎には、まず、家の鍵という概念がなく、家に帰ったらどこかのおばちゃんがいるということが普通なのです。そういうことを子どもが生まれてからすぐ経験できるようになっているのですが、ただ、それは都市のモデルとは全く入れなかったのです。それは、田舎がよいではなくて、ある意味で言うと、田舎がそうでなければ生きていけないからそうなったということなのです。

要するに、皆さんが効率的で生産性の高い札幌市のようなものを目指したからこうなっているわけですから、だから、言い方は悪いけれども、田舎育ちの私としてみては、本当に考えるのだったら、札幌市が目指していた都市モデル、あるいは、都市の再生産モデルというのがもしかしたらよくなかったかもしれないという反省も一回いるのかなという気がするのです。そのときに、これは高齢者のわがままですけれども、高齢者が健康で活躍できている社会というのが実は社会の再生にすごく貢献できるのではないかなと思うわけですよ。

今回の地下街で起こった事件にしても、味方をするわけではないけれども、彼らを見てみると、やはり憤りを感じているのですよね。自分はちゃんとやってきたのだけれども、何で俺たちはこうなのだみたいな。そのときに、やはり、それだけではないよということをおちゃんと伝えるような異なる見方を多少でも経験していると、発散の仕方が変わったのではないかなという感じがしますね。

すごく精神論的な話だけれども、今、札幌の都市や、子ども、孫なんかを見ていると、物すごく制約を受けています。まず言われることは、知らない人と話してはいけませんから。これは本当なのです。私もマンション住まいですけれども、エレベーターの中で知らない人と一緒になったら注意しなさいから入るのです。今、それが社会のルー

ルになっていて、学校でそれを徹底的に仕込まれるのです。それは本当に望んでいる社会なのですかというアンチテーゼが出てくるのです。

私は、そういう場で育っていなかったもので、緩過ぎるところはありますけれども、本当のいい社会というのはどういう社会なのか、安全であればいいのかという話も出てくるのです。

○梶井委員長 おっしゃるとおり、札幌市は、子育て支援のいろいろな施策を打っていて、何年も札幌市が子育てしやすいまちであるかという主観的なアンケート調査をしているのですが、ずっと肯定的な評価が下がっているのです。結局、ここは子育てしやすいまちではないという人が50%以上もいるという感じなのですが、やはり、委員がおっしゃったように、親も自分が育つ段階で多様な世代と接していないからですよ。

○山本委員 そのとおりなのです。ですから、我々の世代の責任とも言えるのですよ。

○梶井委員長 やはり、親世代も、子どもの頃に接しないと相互理解という一つのチャンネルがつかれないのだと思うのです。そして、親世代が多世代と相互作用できないというのは子どもにもうつるわけです。

議論がどうやって高齢者と多世代をうまくつなげて融合させていけばいいのかというほうに移っていると思うのですが、高野委員がおっしゃったように、居場所づくりと高齢者のつながり形成ということをうまく複合的に提示できるような一つの空間を札幌市が提示できれば、そこに世代を融合する、要するに、このまちで世代対立は絶対に起こってほしくないのです、そういう空間づくりというのを一つ提示できたらなと私も感じています。

○高野委員 学童、保育所、幼稚園、それから、老人ホームまではいかなくても、高齢者がコミュニティー会館に集まっている、そこを緩く結ぶ仕掛けなのですよね。

○町田副市長 札幌市の行政課題として一番大きいものは、出生率が東京よりも低いということです。これは、いろいろな施策をやってもなかなか上がってこないのですけれども、今、梶井委員長や高野委員がおっしゃったように、子育て世代に対しての支援だけではなく、もう少し大きく、高齢者施策全体の中で高齢者がまちづくりを担うような形で出生率も高めていかないと、これはどこまでいってもずっと低いままですよ。

○大西委員 私が考えるのは、健康寿命という言葉自体がすごく独り歩きしているといえますか、これだけメジャーになると、何となく健康寿命を延ばさなければいけないということが目的になっている部分もあるのかなと思っています。

なぜ健康寿命を延ばさなければいけないかというと、医学の進歩で長生きはできるようになっていますけれども、その長い人生の中で自分の人生の目的や楽しみを長く続けるためでありますよね。それは、退職してからのセカンドライフみたいに別な仕事というのも一つの考え方だとは思いますが、中には、社会的な役割としての生きがいを感じて仕事を長く続けたい、できる限り現役を続けたいという方がいらっしゃると思っています。

それをかなえるということは、ある程度の年齢になっても仕事がずっと続く、それを失わずに生きがいも持ち続けられるということにもなりますし、そのためには、就職してか

らの働く人生の長さがさらに延びるということになるので、マラソンではないですけども、マラソンも最初に飛ばしてしまうとあっという間に駄目になってしまいますので、長く走り続けるために若い頃からのペース配分を考えると、働く世代からということも大事になってきます。若いころから健康寿命を意識してということでは、年齢で区切らないほうがいいというのは私も賛成なのです。つまり、どこかの年齢から急に問題や課題になるわけではなくて、長年の積み重ねというものがありますので、そういう意味では、長く現役を続けるために、若い頃から健康を意識したり歩くようにすることが大事なのですが、それは仕事や趣味活動といった人生の目的をなるべく長く達成するために健康寿命を延ばさなければいけないのであって、健康寿命を延ばすことを目的としないほうがいいのではないかなと常々感じているところです。

○梶井委員長 本当におっしゃるとおりですね。

そろそろ時間になってまいりました。非常に楽しく、かつ刺激的なご意見をいただきまして、ありがとうございます。

今日は1回目ということで、どちらかといえば、このまちでどのように年を重ねていくことが若い人の希望になるのか、このまちで年を重ねるスタイルというのをどういうふうに見せるかで、それが一つの次の世代の希望につながっていけばいいのではないかなと私は思うのです。今日は、そういう観点で、皆様には、本当に幅広い見地から、むしろ理念的なところを整理していただいたなと思っております。

また、次回もあるということですので、次回はまたさらに話を煮詰めていきながら、皆様と政策を具現化するような方向に詰めてまいりたいと思います。

今日は時間になりましたので、事務局にお返しします。

6. 閉会

○事務局（西村高齢保健福祉部長） 本日は、ありがとうございました。

次回の会議につきましては、委員長と改めて相談をさせていただいた上で、ご案内をさせていただきたいと思います。想定としては7月の後ろのほうかと思っているのですが、改めて相談をさせていただきたいと思っておりますので、その際には、またお集まりいただければと存じます。

○梶井委員長 拙い司会で、皆さんには本当に助けいただきましたが、楽しく議論をさせていただきました。

本日は、どうもありがとうございました。

以 上